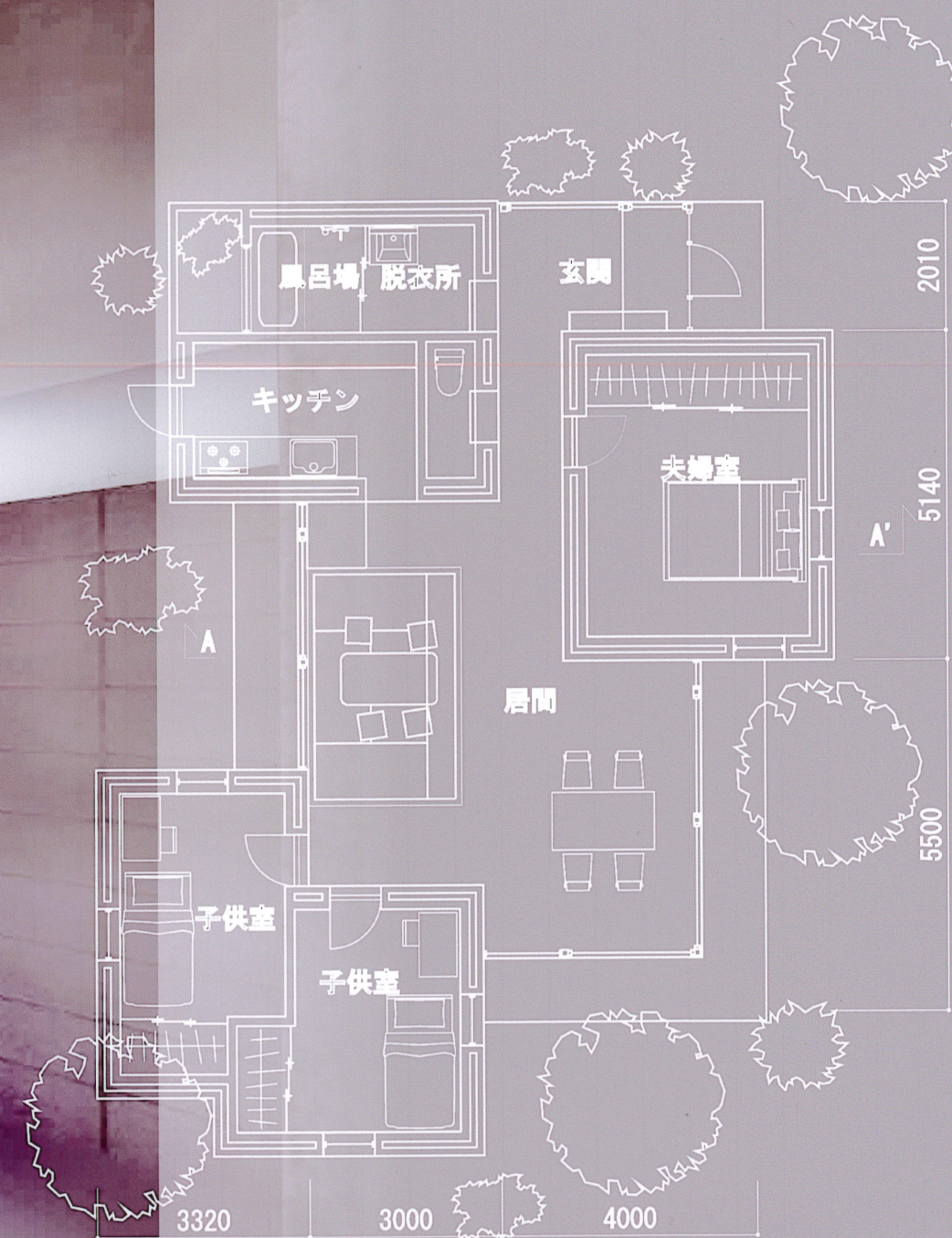
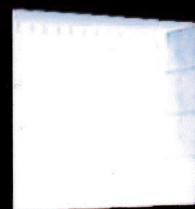


くらし

暗し 暮らし 蔵し

日本人が蔵造りを始めたのは平安時代ごろといわれている。蔵造りは人々にとって大火などの災害から財産を守る役目だけでなく、富の象徴として、やがては店舗や住宅に用いられるようになった。

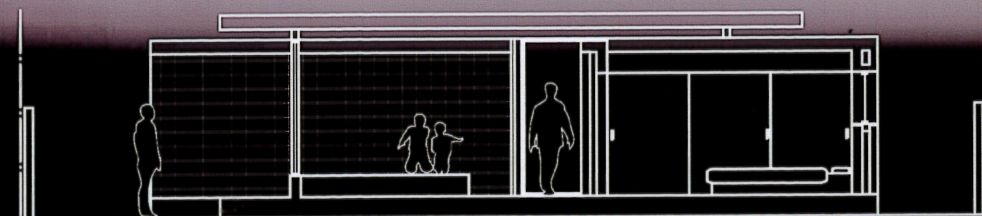
蔵の内部は夏は涼しく、冬は暖かい。そしてなによりも外界から身を守るシェルターになる。この住宅ではコンクリートブロックという重厚な構造体を最大限生かすために、二重の壁を作り、居室を光を抑えた空間とした。この蔵座敷のごとき空間は、快適な環境と柔らかい光で包み込まれ、閑寂な空間を演出する。



平面図 1/100



配置図 兼 屋根伏図 1/1000



A-A' 断面図 1/100

敷地は茨城県結城市結城の一角にある月極駐車場の敷地である。結城を含め北関東には今なお土蔵や石蔵が多く残存し、人々の生活の一部となっている。

私室は強烈な気候や地震災害からシェルターになる堅牢な構造を用いる一方で、共用部は明るく軽快な空間にし、家族が明るさを求めて集まるように設計をした。

